

ちいさなくに - in a small realm

中根 秀夫 映像上映会

さいたま国際芸術祭 2020 美術と街巡り事業 | うらわ街中 2020

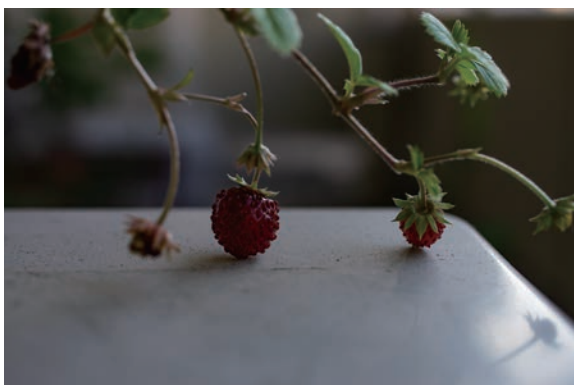
▶ 関連企画 1

新作映像プロジェクト+渡邊ゆりひと ヴォーカル・インプロヴィゼーション ライヴ

3月28日(土) 15:30~16:30

渡邊 ゆりひと | word & solo vocal

中根 秀夫 | images



《ちいさなくに - in a small realm》

詩: 渡邊ゆりひと | 2020年

中根秀夫氏の新作映像《ちいさなくに-in a small realm》は、700カットを超える日常の写真(プランターの花たち、あるいは、国会前の人々)を丁寧に繋ぎ、そこに福島県双葉郡楢葉町の小さな集落で撮影したビデオを加えた映像作品です。

乖離した三つの「場:空間」における折々の出来事に対して、中根氏は非常にプレーンな方法(感覚)で寄り添い、それらを通底している「見えない光:悪い痛み」について、静かに見つめているようです。花たちの言葉、国会前の人々の憤り、福島原発事故被災地の生存。しかし消尽する、それら表層の輪郭を捉えながら、シーンは在り得た筈の祈りの光景を想い起させます。

私たちは、余りにも悲しみ、そして恐れに憤り、その暗い力ばかりを無意識のうちに社会態へ備給し、共有する現実を組み立てて生きてきてしまったのではないだろうか・・・と。もしも私たちが、憤怒と軽蔑の対象にさえ、祈る心を披いていたなら、私たちは本来の生存する力で、無名の今々を生きてゆけたのではないだろうか・・・と。

私は、ここに《ちいさないのり》の歌を、添えることができたかと願っています。

□ Phase 1 year 2016

□ Phase 2 year 2017

□ Phase 3 year 2018

傾けられる ことのない

聾啞のやうな 空の楯を伐つ

焚かれた 息たち

あれら夕べの 反響に封じられて

あり得た筈の 祈りの光景

頑な冬芽を 微睡む

この中空に降る

ちり光塵たちの悪い痛み

記憶の薬が

存ることの根源で

組替へられてしまつても

蜜蜂が訪ふ 風を待つことの

蒼い萼を点さうと

たゞ あの気爽さだけ

覺醒めさせる

こゝ いまいまが

幻であつ たとしても

あした

朝には

えなが若い柄長の番が やつて来るから

こゝ運ばれる 飛行のあたゝかさだけ

何時しか その唇許に

甘やかな 囁りを傳へることの

秘められた 緋色の犠牲を供へても

□ Phase 4 Democracy

剥落した三つの日附

穏やかな雨

冀望の合圖を送る

遠い誓の 紛もない乖離

飛翔する抵抗の上方で
夜の眼差しが 静かに囁ふ

無名の 聲音の圍繞の中
夢見るやうに 屹立する鼻巖が
あかるく 騒めく

頁 終へられた
反復 内的な ずれ
記述 といふ
聲 といふ
期待
傷 消儘したもの

移送された その
群聚の空地で
叛照する
影ばかりが 明日のやうだ
非
白日
卒倒する

- Phase 5 Clouds
- Phase 6 Steps A
- Phase 7 Steps B

Tacet

- Phase 8 Shore
- Phase 9 Nowhere

海の方へ 降りて行かう
静止した青さだけが
永遠的な歩行を忘れさせてくれる

手に傳ふ 記憶の伴連れさへ
こゝあるやうな その指先の囁き

遠い 空無の途で

(「かるたえ・あえりあえ」2013年より)

Phase 10 Forget-me-not

ふるへてゐる
刻限の 闕に 睡りのない 窓貌を 浸して
天穹は

生まれたばかりのしづくのまゝ
浄められた
果ての かすかな肌理を 聴くやうに

もうひとつの
眼差しに ためらふ 眼差しのうちに
偷まれた
漣の髪を束ね 絶へ間なく 去來する

不明の白さ
忘れられた 無数の子午線に 漂ひ
組み解けない
悲憤の 渚へ 小舟を 届けようと
託されてゐた
永遠的な反復 たわみに 微笑むやうな

その息たちの
仄かな唇が ゑろづく 頬に 疳み
黙秘して
いつ証されることのない 言葉のまゝに
いまも あをいしづくを 誦す

End

ながれのきしのひともとは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく

わすれなぐさ エルヘルム・アレント (上田 敏 譯)

[参考1]

うつくしくにのはなし - a tale of a beautiful country

中根 秀夫 | 2014年



ながれのきしのはなは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく

わすれなぐさ ウィルヘルム・アレント (上田敏 訳) *

2013年9月1日。福島県双葉郡楡葉町前原・山田浜地区は、木戸川の河口南東方向に広がる集落だ。鮭が遡上する小さな河川と豊かな自然に育まれた土地と聞く。日曜日だが国道沿いの民家に入影は見られなかった。

1

福島市内から常磐自動車道をいわき市に向かい、そこから浜通りを北上する。浜通りは福島県の東部、阿武隈高地の西側の沿岸地域を指す。広野ICを降りると正面にJヴィレッジが見えてくる。

Jヴィレッジは東京電力が出資し寄贈した、広大なサッカー・トレーニング複合施設で、福島第一原子力発電所の事故対応の前線基地となった。右手には停止中の広野火力発電所の煙突が2本見える。左に折れるとすぐに双葉郡楡葉町の入口で、ここから先が原発20キロ圏内となる。

国道6号線・陸前浜街道を北上すると海側に並走する常磐線の木戸駅があり、その奥に広がる集落が前原・山田浜地区だ。内陸側には数日前にオープンしたばかりのコンビニの仮店舗が見える。幹線道路脇に閉鎖されたままの飲食店やガソリンスタンドが立ち並ぶなか、新しい看板と人の動きは目を引く。

2

2011年3月11日。東日本を襲った震度6強の地震直後、波高10メートルを超える巨大な津波が海沿いの住居と農地を押し流した。福島第一原発から南に15キロの距離にあるここ前原・山田浜地区では、津波の後始末をする間もなく翌日に避難を命じられ、その後の立ち入りは厳しく制限された。

翌2012年8月に楡葉町のほとんどが避難指示解除準備区域となり、夜間を除いて自由に出入りが可能となった。津波被害による瓦礫の撤去も2013年6月末までに完了した。その2ヶ月後、そして震災・原発事故から2年4ヶ月目の夏の終わりに、私はこの奇妙な静けさをたたえる前原・山田浜地区にいる。広い視界の先には損壊し生活を剥奪された家屋が、あるいは道路端の畑には地面に突き刺さったままの白い車が、時を忘れたかのようにその場にとり残されている。

3

楡葉町全体での津波の犠牲者は13人。一人ひとりの命の重さとは別に、私たちがこの数を少ないと感じるとすれば、震災前の人口にして7700人の楡葉町の過疎化について、そして第一原発からわずか11キロの、富岡町と楡葉町にまたがる二つ目の原子力発電所の受け入れの理由についても考える必要があるだろう。震災から3年をむかえる楡葉町の震災関連死は99人にのぼる。他の被災地と比べても福島県の震災関連死は飛び抜けて多い。

不通となっている常磐線の広野駅(広野町)から竜田駅(楡葉町)まで8.5キロの開通に備え、周辺地域の除染作業が進められている。放射能にまみれた土壌や草木などは大きな黒い袋に回収され、日々仮置き場に積み上げられる。奥に見える白い建物はこの地区の瓦礫の搬入施設で、津波に流された「人々の思い出の品」もここで保管されている。周辺の空間線量は福島市内とほぼ同じレベルにまで下がっている。

*

*『わすれなぐさ』“VERGISSMEINNICHT”について

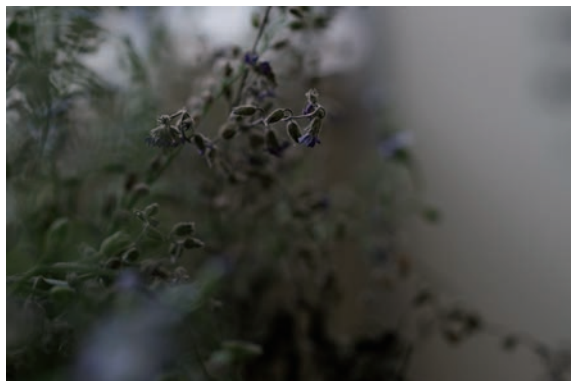
Ein Bluemchen steht am Strom
Blau wie des Himmels Dom;
Und jede Welle kuesst es,
Und jede auch vergisst es.

上田敏(1874~1916)による訳詩集『海潮音』(1905年出版)に収められたこの小さな美しい一片の詩は、ドイツ初期自然主義派の抒情詩人ウィルヘルム・アレント(Wilhelm Arent/1864~1913)による。アレントは、今では本国ドイツに於てほとんど忘れられた詩人であり、それゆえに『わすれなぐさ』は、上田によるこの訳詩集の中にのみ生き続けている、流れの岸の一本(ひともと)の花でもある。

[参考2]

うつくしくにのはなし II - forget-me-not

中根 秀夫 | 2019年



ああ、明日にでもあそこへよう
なぜならいまの僕には、
昼も夜も、あの湖の水の
岸にくだける柔らかな音が聞こえるからだ。
車道を走ってしようと
汚れた歩道に立ってしようと いつも

W. B. イエーツ「イニスフリーの島へ」*

真冬のさなかに彼は消えていった
小川は凍てつき空港はどこも人影がまばらだ
そして雪は街の彫像の輪郭を変え
水銀計は死にゆく日の入口に沈む
我々の手元の計器でわかるのは
彼が死んだのは 薄暗く凍える日であった
ということだけだ

W. H. オーデン「W. B. イエーツを偲ぶ」*

1

「国」というのはひとつの概念であるから、例えば国家や国民、国境という言葉もまた概念以上のものではないはずだ。国に「像／イメージ」を預けることで個々の人間はその国に属する国民となる。異なる国どうしの間には国境線が引かれる。また国を時間軸で管理することが歴史となる。

2

靴底が踏みしめる、面積にしてわずかな土地は私のものであり、そこに立つ時間は常に私自身のものである。その場所と時間にひとつの「像／イメージ」を与えるプロセス、それが「うつろいにくくにはなし」である。私たちひとりひとは「くに」を持っており、それは言葉であり、また記憶でもある。それぞれの「くに」は交差することもあり、あるいは交差しないこともある。私たちの一生とはただそれだけのことだとも言える。

3

[2018年3月2日の拙ブログより] JR大船渡線の気仙沼駅～盛駅間は2013年にBRT（バス高速輸送システム）として再開した。鉄路復旧が望まれたが多額の費用の抛出がかなわず、今後もBRTによる運行が続くという。

2月24日土曜日。12:01 気仙沼駅発。数人の乗客とともにBRTに乗り込む。12:27 奇跡の一本松駅着。観光客の利便性をはかり新設されたバス駅だ。小雪が混じる寒い週末の日にこの駅で降りたのはひとりだけ。震災から7年を経て、死者1,556人、行方不明者203人、家屋の倒壊4,046棟という津波の大きな被害を受けた陸前高田に初めて足を下ろした。

復興のシンボル「奇跡の一本松」については説明の必要もないだろう。2013年7月以降、津波に耐えた一本松は、地に根を張った樹齢200年の巨木ではなく、防腐処理が施されコンクリートの基礎の上に移植された避雷針付きのモニュメントとしてそこに立っている。

工事現場を囲むように遊歩道があり、その柵越しに一本松を臨む。率直な感想を言えば、それは象徴的な意味でも生命を欠いた造形物に見える。物質的な意味で生命を持たない、コンクリートの塊でしかないユースホステルの建物が湛える強い「不在の」生命感と比すれば。

インターネットでは、一本の松の木としての命が潰れる直前の姿を見ることができる。その画像からは、私たちが立つ地平と絶妙ともいえるバランスを保ち、震災後の陸前高田の人たちと対峙し対話してきた命の姿がひしひしと伝わってくる。だからそれはそれでひとつの役割を終えたのだと思う。

しかしだからと言って、この場所に立つ「奇跡の」一本松が、私たちの風景に不要なものだとは決して思わない。そこには幾つもの時間があり、見上げた幾つもの空があるだろう。語られた幾つもの言葉と、語りえない幾つもの記憶とともに。

震災後、あるいは原発事故の後に、私たちが私たちの中の「傷

を共有し、私たちの内に「傷」を抱えることが許された時期が確かにあった。今はどうだろう。強くあること、復興をすること。弱さは切り捨てられ、あらかじめ規定された二者択一が迫られる。私たちは私たちの再生を、時間をかけて構築すべきではないのか。それは私たちの私たち自身のための対話でもある。

*

* W. B. イエーツ『イエーツ訳詩集 最後のロマン主義者』加島祥造訳、港の人、2007年。「イニスフリーの島へ」は、若きW. B. イエーツ(1865～1939)のおそらく一番有名な詩で、詩集「薔薇」(1890年)に収められている。引用はその最後の段落で、アイルランド西部スライゴーに位置するギル湖に浮かぶ荒涼として美しい小島を、速く離れたロンドンの地で謳っている。イエーツはアイルランドの詩人で、19世紀末から20世紀初頭にかけての「ケルト文芸復興」運動の旗手である。

* 1939年1月に「最後のロマン主義者」W. B. イエーツが亡くなった。同年9月、ドイツがポーランド領内に侵攻し、ポーランドの同盟国であるイギリスとフランスドイツに宣戦布告、第二次世界大戦が始まる。W. H. オーデン(1907～1973)がイエーツを悼むこの詩を書いたのは、日常に忍び寄る戦争の、硬く乾いた靴音が聞こえるヨーロッパの凍える日々のことである。オーデンは1930年代にイギリスの詩壇で活躍。1939年にアメリカに渡り帰化し、以後はアメリカを代表する詩人となる。引用は拙訳による。

* 三浦英之『南三陸日記』集英社文庫、2019年。東日本大震災で甚大な津波被害を受けた宮城県南三陸町の人たちについて、朝日新聞にコラムとして連載された文章をまとめたもの。2018年の「再訪」を加え文庫化された。

「悪夢は今も続いている。多くの人ががれきの中をさまよい歩くこの国で、できるだけ多くの記憶と言葉と映像を残そう。生き延びることができた私たちの、それが最大の使命だと感じる。」

ちいさなくに - in a small realm 中根秀夫上映会

会期： 2020年3月27日、28日

会場： さいたま市民会館うらわ ホール

関連企画資料

1. 新作映像プロジェクト+ヴォーカル・インプロヴィゼーション ライブ
出演： 渡邊ゆりひと・中根秀夫

2. @「もういちど秋を」即興ライブ
出演： かみむら泰一・中根秀夫

詩： 渡邊ゆりひと © Yurihito Watanabe

テキスト・写真： 中根秀夫 © Hideo Nakane

中根秀夫と渡邊ゆりひとによる《ちいさなくに-in a small realm》は今回の上映会終了後にあらためてレコーディングを行います。販売等の詳細は中根のホームページにてお知らせします。

[おことわり]

本上映会および関連企画の開催につきましては、右のQRコードより、特設サイトの最新情報を必ずご確認ください。やむを得ぬ事情によりプログラムの変更・中止の可能性もあります。また、中根のホームページでも逐次情報を更新しています。https://hideonakane.com



▶ 予告 7月24日～8月9日に銀座Gallery Nayuta、10月には日本橋galerieHにて関連する展示を行います。どうぞお楽しみに。